

# 「一字の書」の試みー書写を楽しくー ー自分らしい表現を工夫するー

大阪府大阪市立葦中学校 外山 千浪

## 一 はじめに

一般的に「書写」の授業というと、みんなが一斉に同じ手本を見て練習しているというイメージがある。生徒の中には、長年書道教室に通い熟練者もいる。習っている人の作品とそうでない人の作品とでは、はっきりと差が出る。ただ単に、見た目がきれいな字を書くということだけが目標ではなく、机間巡視の中で一人ひとりに、個人の課題なり、目標なりは具体的に示すようにしているのだが、書写の苦手な生徒には難しい。それでは、生徒が感心・意欲をもって書写学習に取り組むためにはどうすればいいか。

## 二 一字の書を自分らしく書く

一年の終わりに、「これまでの書写の学習で学んだことを生かして、自分の好きな漢字一字を自分らしく表現する」という課題に取り組んだ。「自分の好きな漢字を、自分らし

く書く」ということなら、生徒みんなが倦むことなく最後まで意欲的に取り組めるのではないかと思ったからだ。生徒には次の二つのことに留意するよう指導した。

- (1) 自分らしく表現するために書体や筆をはじめとした筆記用具、墨の濃さ等を工夫すること。
- (2) 漢字の意味をよく考えて書くこと。

## 三 学習計画

- ① 自分が好きな字を二つ選び、それぞれ漢字の意味や成り立ちを辞典で調べる。調べた漢字二つの中から一つを選び、『五體字類』で書体につ

いても調べる。(二時間)

- ② 鉛筆で、自分が選んだ字を様々な書体で書いてみて、最も気に入った書体を選択する。毛筆で練習し、清書する。自分の名前をひらがな書きで書き印を赤のサインペン等に入れる。(二時間)

「一字書」の作成資料

一年( )組( )番 名前( )

\*好きな書体で書いてみよう\*

--	--

\*選んだ漢字 ①( ) ( ) ②( ) ( )

\*選んだ漢字の意味

②	①
---	---

#### 四 学習活動



獨創性を重視したかったので、できるだけ決まりごとはなくしたかったが、展示や交流等のことを考えて豆色紙大(寸法12×13.5センチメートル)の用紙に清書することにした。

特に生徒の興味関心を引いたのが『五體字類』で書体を調べることであった。教科書に出てくる楷書・行書はもちろんのこと、草書、隸書、篆書など書体がいろいろあるのを知り、大いに自分らしい線、

自分らしい形を追求したようだ。上の右と中央の生徒作品は同じ「笑」という字であるが、感じが全然違う。どちらも「笑」という漢字の意味をよく考えて書けたと思う。右は書いた本人の笑顔にそっくりで、中央は犬と走り回って喜んでる作者の姿が目浮かぶようである。上の左は「リラックス」とか「癒し」とかを感じさせ、「楽」という漢字が持つイメージがうまく表現されていると思う。

「自分らしい表現を工夫して」ということだけしか言わなかったが、この取り組みの中で、生徒たちは自分が選んだ漢字の意味や成り立ちをふまえ、自分が考える、その漢字のイメージを的確に伝えられるように「書体」、「筆使い」、「字形」、「配置」などに気を配ることを学んだ。生徒によっては、墨の濃淡を微妙に調整したり、朱液を利用したり、ハブラシなどの新しい(?)筆記用具を開発したり、と凝った工夫をしていた。わが輩中学校の校訓は「創意工夫」であるが、文字通りであった。生徒たちのもつ可能性は計り知れないなど改めて感じた。

#### 五 おわりに

はじめにも書いたように、最後まで意欲的に書写の授業に取り組ませるといのが、課題であった。この「一字の書」の取り組みは

目新しいということもあったのだろうが、いつもの書写の授業より意欲的に取り組んでいたように思う。時間内に完成させることができなかった生徒が後から提出しにきたときに「難しかったけど、おもしろかった。」と感想を述べてくれた。私のところに集まってきた作品を先生方に見て頂いた。おおもむね好評で「作者らしさが出ている。」と言ってくれました。先生方の言葉を聞けば、さぞかし子どもたちも自信がついたことだろう。それだけに、授業時間の都合でこの取り組みが次の課題につながるような、展示・交流の時間や振り返りの時間が充分とれずに終わってしまったことが残念である。指導計画を練り直し、また挑戦してみたいと思っている。

#### 参考文献

貞政少登『一字の書レッスンブック』木耳社、二〇〇三年  
高嶋悠光『字てがみを書こう』JDC、二〇〇二年

とやま ちなみ 大阪市立葦中学校教諭。どのようになれば、楽しく、おもしろい授業が展開できるのか、日々模索しています。